慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	支那研究(慶應義塾望月基金支那研究會編, 岩波書店發行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.3 (1930. 9) ,p.156(512)- 158(514)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300900-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

盛ならんとするの傾向は愉快な現象である。隨つて之に關する著述も遽かに增加し、既に月刊雜誌「鄕土」も刊行せられるに至つた。斯樣な現象は、一つには從來の空疎なる議論に飽き果てた人心が實證的研究に心を寄するに至れる傾向の現はれでもあらうが、また高級學校增設の結果、地理學に關する講座科目の急增と相俟つてその專門研究者の增加したことが斯學の進步を促がし、從來の研究その物から轉じて人文地理學的方向に重心を置くに至つたためでもあらう。さうして、是等の傾向を導くに與つて力のあつたのは、早くから斯界に名聲を馳せてゐた本書の著者小田內氏の如き人々の努力によるのである。

本書は、著者が「長い間の思索と體驗を通じて、常に鄕土の人文地理學的考察の研究に努めて來た論考と、臨地實證に用ゐた調査方法との記錄」（序文六頁）であつて、本書の內容は三部に分たれ、その前半を占むる「鄕土としての村落と都市」は、鄕土の研究過程から村落立地の考察、村落社會の地理的要素、地理的環境としての土地、都市地理研究、風景形態としての都市、都市的人口集團の一考察を含み、著者自からの意見を窺ふべき本書の主要部分である。本書の後半は、「鄕土地理への學的根據」として、之に關する學界の傾向を紹介することを目的とし、ルプレーの思想と地域研究、地域と國と境界、イギリスの地理學的思潮、ドイツとロシヤの鄕土教育、フランスの地理教育等について、歐米の學者の意見を補綴して、簡潔にその要旨と印象を傳ふるに努め、最後に、「鄕土地理研究項目」として、鄕土觀察項目、ルプレーハウスの地域調査項目、合衆國の臨地觀察項目、フランスの町村部落並に獨立家屋の研究細目を揭げ、以て實地研究者の便に供し、加ふるに三十二個の圖版を挿入して本文の說明に資してゐる。

「地と人」との關係が、文化的社會科學、殊に史學にとつて、重要であることは誰も知る如くであつて、その綜合的研究を完成せんがためには、その小なる單位の研究の進步に俟たねばならない。人事の活動の大なる舞臺としての地的環境を明かにするがためには、我等が何等かの形式で常時觸接しつゝある各自の鄕土の研究から手を初むべきである。從來本邦に閑却され勝であつた實物教育の缺陷を補ふのには、鄕土に親しみ鄕土に理解を持たせることに如くはない。本書の流麗なる文章は知らず識らずの間に讀者に鄕土地理の研究指針を會得せしめ、實地についての研究心を喚起せしめる。「地域的進化としての鄕土の地理的認識を求むる若い學徒と教育者、殊に地方の青年子女に……捧げんとする」（序文六頁）著者の目的は、本書に於て、十分に達せられてゐる。（間崎万里）

支那研究（慶應義塾望月基金支那研究會編、岩波書店發行）

輓近我が國に於ける支那研究は旺盛となり、之が研究機關も逐次發達を見るに至つたが、われらが歐米に於けるそれと比較する時、そこに遺憾に堪へない幾多の點を發見する。

歐米に於ける支那學の近狀如何。かの亞米利加に於ける支那學者として知られてゐる Latourette 氏は大戰後 The American Historical Review (vol XXVI, No. 4) に Chinese Historical studies during the past seven years と稱する一篇を揭載し、歐米に

於ける支那研究の一斑を叙述して米國人に極東研究の必要を說いたことがあるが、當時われらは傷く啓發され、支那研究の必要を益々痛感したのである。

次に石田幹之助氏は東亞同文會の雜誌「支那」の昭和二年七月號八月號、九月號及び翌三年六月號七月號等に歐米に於ける支那學の最近の狀況に關する有益なる論文を發表されてゐる。(同氏の大正十五年四月以降「支那」に數回連載された「最近に於ける支那の支那學」昭和三年十一月號、十二月號の「東亞」に載せられた滿洲に關するロシアの書物」及び翌四年七月の「思想」に書かれた「最近に於ける支那學の展望」等は併讀すべきものである)また松本信廣氏は本書に於て佛蘭西に於ける支那研究に關し幾多指針に富む叙述をされてゐる。

最近支那に於ける日本研究熱熾烈を極め、その態度も益々眞摯になつてきた今日、われらは學究の徒も、實際方面にたづさはる者も幾多の方面から支那を研究する所なくてはならぬ。

此の時に當り、本塾望月基金支那研究會により「支那研究」が公にされ、支那研究熱を刺戟するに至つたことは寔に祝すべきことといはなければならぬ。該研究會は實業家望月軍四郎氏の寄附によつて生れたものであつて、支那學及び支那各般事情の調査研究に從事してゐる會である。昭和三年四年兩度に於て其の會のために行はれた講義の大部分が本書となつて世にあらはれたのである。

坂西利八郎氏は「現代支那研究の態度」に於て、在支二十三年間の尊き經驗を概述され、有田八郎氏は「經濟上より見たる日支關係」に於て、沿革的に日支兩國の經濟關係を略述されてゐる。

松井等氏は「民國革命史論」に於て、民國十八年間に亘つて起つた複雜な現象を政治、外交、經濟、社會、思想等の方面から考察され、王大楨氏は「新しき中華民國の建設と日支兩國の關係」に於て、日支の乖離の不自然を强調し、治外法權と租界の不合理を呼號されてゐる。

本塾大學教授及川恒忠氏は「北京政府時代の立法と行政」に於て第一講國家根本法の沿革(憲法略史)、第二講行政組織(中央政府組織)に關し、その蘊蓄を披瀝され、神田正雄氏は「大正四年の日支交涉」に於て、當時の事情につき興味あり且有益な叙述をされてゐるが「氏は朝日新聞特派記者として當時北京に滯在されたのであるからして、かゝる叙述が生れたのも怪しむに足りぬ。

根岸佶氏は「支那に於ける國際財團」を、木村增太郎氏は「支那の貨幣制度」を、上田恭輔氏は「滿洲に於ける金融、經濟問題」を夫々叙述されてゐるが、此等の諸篇は支那の經濟事情を知る上には味讀すべきものである。

本塾大學助教授松本信廣氏は曩に滯佛數箇年、支那學を研鑽されたのであるが、「佛蘭西に於ける支那研究」に於て、其の研究の一端を披瀝されてゐる、同氏はシャバンヌ、マスペロ、ペリオ、コルディエ、グラネー等の業績について略述され、最後に日本の支那研究に對し、次の如く要望されてゐる。即ち(一)佛蘭西の支那學研究の狀態から見て、日本はもう少し言語學の研究に力を注ぐ必要があること。(二)支那の研究と他の科學の研究とを非常に密接にすることが必要であること。(三)日本の支那學の研究にさいし、共

同一致の精神が必要であること。（四）日本に目錄學を發達させる必要があること。（五）日本に於てももう少し博物館や研究所を造り、各地に研究者、探險家を派遣して色々の器物を發掘し、さうしてさういふ物から實際の支那文明を研究するといふ機運を作る必要があること等であるが、全く同感に堪へない。

次に佛蘭西に於ける鏘々たる支那學者アンリ・マスペロ氏は「先秦時代の支那に於ける西方文化の影響」について叙述されてゐる。この雄篇はかつてマスペロ氏の滯京當時本塾に於て講演されたもので、少しく無理なところもあるが、其の史眼、史才には驚嘆に値するものがある。

最後に服部宇之吉氏は「目錄學概說」に於て、目錄の意義、目錄の起原、目錄の變遷、目錄の職分等につき叙述し、目錄學の必要を强調されてゐる。

要するに本書は立派な支那研究書であつて、支那研究者を利すること大なるものがあることは論を俟たない。（宮島貞亮）

國民黨と支那革命　共産黨とその關係（安倍源基著　人格社發行）

民國十三年四月十二日發布せられた孫文の國民政府建國大綱に依れば、國民政府建設の基礎は、三民主義と五權憲法にありとし其の建設の順序を軍政訓政、及び憲政の三期となし、民國十七年（一九二八年）六月北支平定と共に軍事行動も一段落を告げて軍政時期を終り、玆に訓政時期を開始したるものとなしてゐる。然るにその實際建設事項に關する訓政宣言たるや、實に空なる宣傳に過ぎないものがあり、民族主義の主張に基く北伐運動には兎も角一應の成功を收め、其の他排英運動や、排日運動や、乃至は不平等條約の撤廢運動の如き對外關係に於ては相當の成功を收めたけれども、飜つて其の內政方面を見れば、政治の建設、經濟の建設教育の建設一として進步改善の跡の認めらるべきものがなく、徒に軍閥の打破とか、財政の統一とか、裁兵とか、又は淸廉なる政府の樹立とかと聲のみ大にして天下を欺瞞するものといふべきである。

兎に角現在の國民黨乃至國民政府なるものは、一部世間に誤傳される如き立派なる國民的理想や、革命的精神を有する政府でないのみならず、黨內政府部內の不統一新軍閥の對立抗爭は間もなく再び一大反蔣運動を起し、遂に武力對抗となり、內亂狀態に環元したのである。加ふるに共產黨各地に活動して暴動を起すあり、國民黨に依る支那の完全なる統一は多事多難といふべく前途尙遙遠なる觀がある。

今次の反蔣運動は、閻錫山を中心として、馮玉祥、改組派、及西山派等の大小軍閥合流參加し、北方政府樹立を標榜し、南北二大分裂の形勢となり、一面共產軍の暴動、放火、奪略、虐殺等恐怖的事件をさへ伴ふに至つた。かくして本年九月正式に北方政府の成立を見、南北兩政府の二大對立となつたのである。然るに北方政府部內の不統一は、其の後果して統制ある政府として活動するか否かに就て世人の疑問を喚起した所であり、飜つて南北兩軍の戰局は次第に南軍に有利に轉回し來り、十月に入り馮玉祥の太原